

特集\*「在日」文学—過去・現在・未来

◆インタビュー◆  
時代のなかの「在日」文学  
李恢成 聞き手 河合修…… 2

分断から離散へ—「在日朝鮮人文学」の行方—  
変容と継承—(在日)文学の六十年—  
アイデンティティ—クライシス—  
—「在日」文学が直面する一つの問題—  
変容概念としての在日性—在日朝鮮人文学／在日文学を考える—  
川村 湊…… 25  
磯貝 治良…… 32  
黒古 一夫…… 47  
尹 健 次…… 59

◆インタビュー◆  
『看守朴書房』から『火山島』へ  
—ナシヨナリズムの風景のなかで—  
金石範 聞き手 小林孝吉…… 72

虚無と対峙して書く—金石範文学論序説—  
金鶴泳論  
林 浩治…… 87  
櫻井 信栄…… 99  
徐 京 植…… 111

小説は他人を巻き添えにしてよいか  
—「石に泳ぐ魚」裁判をめぐって—  
アイデンティティの脱構築としての「自分探し」  
井口 時男…… 125

—柳美里「8月の果て」論—  
在日文学と短歌—韓武夫を手がかりとして—  
在日詩のクレオール性をめぐって  
高柳 俊男…… 136  
佐川 亜紀…… 148  
李 修 京…… 161  
近代史の影を見つめて 金熙明 173

エッセイ  
「在日」文学は消滅するのか  
文学と出会う  
多様化と空しさ  
朴 重 鎬…… 187  
深沢 夏衣…… 190  
李 美 子…… 193

太陽が地底で昇った日  
郭 炯 徳…… 196

創作  
何処何様如何草紙4 歌  
ばくきよんみ…… 202  
元 秀 一…… 205

コラム  
韓国における在日文学の受容・研究  
海外の「在日」文学の研究事情  
—ドイツ語圏と英語圏の場合—  
岩田IIワイケナント・クリステイナー…… 218

文献案内  
「在日」文学文献紹介  
河合 修…… 225

書評  
浦田義和著『占領と文学』—支配と被支配の「文学史」  
横手 一彦…… 230  
佐々木亜紀子著『漱石 響き合うことば』  
溝部優実子…… 232

新刊紹介  
高良留美子著 詩集『崖下の道』 岡野幸江 234  
日本  
ネパール文化交流・ナマステ会編 日本・ネパール合  
同詩集『花束 第四集』佐川亜紀 234 平岡敏夫著  
『もうひとりの芥川龍之介』菅井かをる 235 李修京  
編『韓国と日本の交流の記憶—日韓の未来を共に築く  
ために』浦田義和 236 坂本正博著『帰郷の瞬間—金  
井直』昆虫詩集『まで』川原よしひさ 236 逸見久美  
著『回想 与謝野寛 晶子研究』近藤華子 237 『時代  
を生きて』刊行会編『時代を生きて』文集・鎌田定夫  
深津謙一郎 237 黒古一夫著『魂の救済を求めて—文  
学と宗教の共振』小林孝吉 238 川村湊著『村上春樹  
をどう読むか』矢澤美佐紀 239 高橋秀晴著『七つの  
心象 近代作家の故郷秋田』伊原美好 239 荻野富士  
夫著『横浜事件と治安維持法』岡野幸江 240 川原よ  
しひさ著『シリーズ①詩の現在 川原よしひさ集』河  
合修 240 高橋敏夫著『藤沢周平という生き方』深津  
謙一郎 241 『社会文学事典』刊行会編『社会文学事  
典』沼田真里 242 東栄蔵著『信州の近代文学を探る』  
矢澤美佐紀 242

事務局・報告 243 会員の論文・創作・刊行物 245  
編集後記 251

# 在日文学と短歌

——韓武夫を手がかりとして——

高柳俊男

## (1) はじめに

人は人生を生きるなかで、さまざまなる出来事に出くわし、また精神上の体験をする。時には驚き、喜びながら、また時には悲しみ、悩みながら、日々の生を生き続けている。その喜怒哀楽や感情が言葉としてほとばしったものが文学だとするならば、詩歌は人間にとって、もつとも原初的な文学形態だと言ふことができよう。

日本の詩歌を考へる場合、詩と同じく、あるいはそれ以上に、短詩型文学である短歌や俳句が占めてきた大きな位置を無視するわけにはいかない。職業的な歌人・俳人の数は少ないかもしれないが、各種の新聞雑誌に設けられた読者投稿欄が象徴するように、短歌・俳句の愛好者は膨大な数にのぼり、広大なすそ野を形成している。自費出版として出される歌

集・句集も、毎年その数を知らない。かつて『昭和萬葉集』(講談社、一九七九〜八〇年)が試みたように、それらの作品を通して、この激動の時代を生き抜いてきた庶民のさまざまな経験や心境を読み取ることが可能であろう。

それは在日朝鮮人(総称)の場合でも、一定程度当てはまるものと思われる。とりわけ日本語を母語として生まれ育った在日二世以降の世代においては、日々の生活の中での雑感や、自らの置かれた不条理な立場や錯綜する思いを文学として結ぼうとしたとき、身近なところに短歌や俳句の存在があった。

しかし、在日朝鮮人文学における短詩型文学の流れは、いまだきちんと体系化されることがないように思われる。

たしかに、在日朝鮮人文学を総括的に捉えようと試みた川村湊『生まれたらそこがふるさと』(平凡社、一九九九年)に

みようと試みである。

においても、まさにその表題が李正子の歌から取られたことが示すように、短詩型文学を扱った章があるにはある(第三部三章『この国』の抒情―尹徳祚から李正子まで)。ただし、ここでは、天皇制や侵略戦争を讃へる戦前戦中の歌集に続いて紹介されたのは、一九八四年の李正子『鳳仙花のうた』(雁書館)であった。かりに「註」で簡単に言及された歌人まで含めるにしても、せいぜい一九七〇年代以降の金夏日や川野順(兪順凡)止まりであつて、中間に大きな時間的欠落がある。

二〇〇五年に刊行された森田進・佐川亜紀編『在日コリアン詩選集』(土曜美術社出版販売)は、戦前以来の在日朝鮮人の詩を通覧し、そこから在日詩人たちの自己表現や日本社会に向けたメッセージを読み取ろうという意欲作だが、短詩型文学においても将来、同様なものが編まれる必要がある。本稿はいずれそうしたものが実現されることを願ひ、それに向けたささやかな問題提起でもある。

## (2) 韓武夫の生い立ち

その認識は、先ごろ刊行された磯貝治良・黒古一夫編『在日文学全集』(勉誠出版、二〇〇六年)においても変わらなない。全一八巻のうち第一七巻に「詩歌集Ⅰ」があり、短歌も取められているが、ここでも登場するのはやはり金夏日と李正子の二人だけであり、俳人は一人も収録されていない。一方、第一七巻「詩歌集Ⅰ」と第一八巻「詩歌集Ⅱ」に収められた詩人は、合計一七人の多きに達する。

小論は、一九五〇年代から詠み継いできた歌を一九六〇年代に歌集『羊のうた』(桜桃書林、一九六九年)にまとめた、韓武夫という埋もれた一歌人の足跡を追いながら、また同じく一九六〇年代以降『人間記録』(白玉書房、一九六〇年)『告

前掲歌集『羊のうた』の「後記」と、『蚕』(飯田明子を編集発行人とする短歌同人誌)一八号(一九七五年三月)に載せた「雪幻記」という二つの自伝的文章から、韓武夫の生い立ちをみていくことにしたい。

日本歌』(白玉書房、一九七八年)などの歌集を世に出してきたりカ・キヨシにも言及しながら、戦後の早い時期における在日朝鮮人の作歌活動や、歌に表れた精神の軌跡を跡づけて

韓武夫は一九三二年、在日二世として大阪・猪飼野の長屋に生まれた。母とは死別、父とは生き別れのため、もっぱら祖母に育てられた。祖母はのちの一九六〇年、北朝鮮帰国事業の開始直後に、叔父とともに北朝鮮へ帰国し、八年後に他界したが、それを知ったときに詠んだ一連の歌を見ても、母なき子としていかに祖母を慕っていたかを窺うことができる。一九三七年、同級生の三分の一が朝鮮人だという鶴橋尋常小学校(現、御幸森小学校)に入学。しかし未入籍のため、入学式終了後にクラスに配属されず、いつまでも校庭に立ち続

けることを余儀なくされた。「私の永い人生のかなしみと劣等意識を決定づける長い長い一日」だった、という。

一九四五年、猪飼野高等小学校を学徒動員のまま卒業。在学中はよその子と違つて母のいない寂しさと、ノートも買えないほどの貧困による苦痛を味わう。しかし皇民化教育の影響で少年兵に志願し合格するが、幸いにもすぐ八・一五を迎えた。祖父はこの直後、南朝鮮に帰国している。

戦後は京都に引越し立命館高校に入学するが、在日本朝鮮人聯盟(朝鮮)の特権により無料で映画ばかり見ていた末に、月謝滞納で退学。父が茨城県に在籍を知り、父のもとに行つて養豚・密造酒造りなどの仕事を手伝う。しかし父のことが、そしてそれ以上に聖なる母のイメージを打ち砕く義母がどうしても好きになれず、父が地元の民団支部長に就任したのを機に、別に暮らす。筑波山麓の豊かな自然環境の中で生活は、思春期の多感な青年の感受性を大いに刺激したであらう。

当時は朝鮮戦争に突入していく時代で、在日の両陣営とも激しい闘争や抗争を展開していく。そのなかで韓武夫は、過激な民族運動についていけず、「独自の存在理由を欲して」、政治より文学の道を求める。志賀直哉から古典まで、日本の文学をさまざまに読み漁るなかで、石川啄木の「地図の上朝鮮国にくろぐろと墨をぬりつつ秋風を聴く」の一首にいたく感動し、これを契機に自分でも歌をつくりだしたという。

に消極的に生きた一人の朝鮮人の貧しい詠嘆から」つけたという。

その後、第二歌集は出ていないが、ある時期までは『蝨』『短歌』などの雑誌や合同歌集などにおいて、作歌活動をしていくことが確認できる。前述の『昭和萬葉集』にも、韓武夫の歌が全部で九首採られているが、そのうち四首が『羊のうた』刊行以降の作品である。

一九九二年秋、脳の病気で倒れ、闘病生活のすえ一九九八年に他界。享年六七歳だった。なお本名のほか、時期により「西原武夫」や「小泉武夫」などの日本名も使っていた。

### (3) 韓武夫の短歌をめぐって

では、以上の略歴のような人生のなかで断続的に歌い継がれた韓武夫の歌とは、どのようなものなのだろうか。また在日朝鮮人の彼にとって、短歌を作るといふことはどういう意味をもっていたのだろうか。

韓武夫本人は歌集『羊のうた』(後記)の書き出しで、うたは「心のうちに根をおろし、奈落の底にでも落ちこんでゆくような私を内面から強く支えてくれた。うたは、わが魂であり、わが思想であり、強い民族意識をめぐめさせてくれたわがイデオロギーでもあった」と記している。それはのちの一九九七年、句集『身世打鈴』(石風社)を世に送り出した姜琪東がよく書き記す、「精いっぱい抗い」「最も切っ先の鋭い

このころ脊髄を病み、一年ほど療養生活を送る。のち社会復帰後、父の遊技場を手伝いながら歌を作り、新聞雑誌に投稿。『朝日新聞・茨城版』の短歌欄の選者だった縁で、大野誠夫の「砂廊」に入会し、歌を本格的に勉強する。

日本人女性と結婚し、一九五六年に大阪へ戻つて化学工場の労働者となる。このころ、「短歌研究新人賞」佳作、第三回「角川賞」候補に上るなど、歌も上達してその才能を認められるに至っていた。しかし長男の誕生(のち失明)があり、また妻の病気や自らの激しい肉体労働のために、次第に休詠がちになっていったという。

一九五九年から始まった北朝鮮帰国事業の盛り上がりなかで、雑誌『短歌』(角川書店)の一九六〇年二月号が、在日歌人の歌と評論を収めた特集「祖国をうたう」を企画。作品依頼があったのを機に、一九六三年春に「作風」(「砂廊」の後身)に復帰し、再び歌を作りだしたという。この特集「祖国をうたう」については、のちにまた触れる。

このように、ブランクを間に挟みつつ詠み継がれた歌を一冊にまとめたのが、韓武夫の唯一の歌集『羊のうた』である。この歌集は一九六九年、大野誠夫を発行者とする埼玉県入間市の桜桃書林から「作風叢書第十六篇」として出版された。八〇〇円の定価が付いているが、歌集や句集の大半がそうであるように、実質的には自費出版に近いものと思われる。題名は、「日本の国に羊の歳に生れ、羊のように迷い、羊のよう

短刀」としての作句活動と重なるところがある。

もつともここだけ取り出せば、朝鮮人としての民族的な自己主張に強く彩られた内容のようにも受け取れるが、そうではない。私が見るに、歌集『羊のうた』に朝鮮人としての思いを直接的に詠んだ歌が占める割合はそう大きくないし、またそうした歌も民族や祖国を直情的に詠い上げる類ではなく、屈折した心情や内に秘めた意志を盛つたものが多い。陰影の中に哀感が漂うが、かといって通俗的なセンチメンタリズムに安住してはいない。

時代的にみると、一九五六年から六〇年までの歌を時代順に第二部「日本の春」に収め、第一部「羊のうた」では一九六三年から六八年までの歌を逆時代順に収録している。したがってこれらのなかには、北朝鮮帰国事業、四・一九革命、日韓条約、ベトナム戦争、金嬉老事件などを時代背景として詠み込んだ歌もある。

また形式的には、師の大野誠夫が「序」に書いているように、「伝統詩の正統をふんで、歴史的かなづかいを使用し、日本の古語の美しさを愛し、かなりクラシック」だと言えるかもしれない。

では、具体的に何首か挙げてみよう。

- ・日本人らしく擬装する民族の哀しみもちて吾は生き来し
- ・鮮人吾に嫁ぐゆゑ妻を傷つけしパンパンという語を最も憎む

・われゆゑに朝鮮人らしく清きまで装い凝らす妻の貞節  
・激情に随ちむおそれをいまして腰ひくく構ふ異邦者の  
吾は  
・やり場なき怒りに狂い妻を打つ不意にきたなき吾が朝鮮  
語

いずれも初期の作品である。朝鮮人に対する偏見の強い時代であつて、後ろ指さされぬよう低姿勢で、たえず日本人を装いながら生きてこざるを得なかつた作者の苦衷がにじみ出ていよう。それでも時にはやり場のない怒りを妻に向け、「イニョン（このあま）」といった罵り言葉が口をついたのであろう。この種の忍従の歌に接するとき、同様の心情を詠んだ姜琪東の句集『身世打鈴』が、また思い出される。

こうした一連の歌からすると、

・白き舗道よぎらむとする霊柩車音もなく吾が轡を轆き行く

・炎天の舗道を鎖鳴らしゆく油槽車も吾も禍もてり  
といった歌も、字面の奥に深い意味が宿っていることを思い知らされる。

筆者としては、このような歌のほか、

・唐辛子赫く耕地の前衛にあり砲のごと天を射しみつ

・幾億の実を結ぶ麦銃にして天を刺すなり雨に打たれつつ  
などの歌を印象深く受け取った。前者は、ピーマンやししとう  
などと違つて、唐辛子は上を向いて天を衝くように実る。色

ており、きわめて高い評価を与えている。

#### (4) 在日朝鮮人文学のなかの短歌

このような韓武夫は、在日朝鮮人文学史のなかでどのよう  
に位置づけるべきであろうか。そもそも在日朝鮮人のなかで、  
日本の伝統的な文学形式である短歌に魅せられ、短歌によつ  
て自己を表現してきた人がどれほどいるのだろうか。

前述した『短歌』一九六〇年二月号の特集「祖国をうた  
う」には、許南麒と李丞玉の評論のほか、リカ・キヨシ、河  
義京、西原武夫（つまり韓武夫）、杉原宗三郎（ハンセン病療  
養所「多磨全生園」入居）、金山光雄（前述した金夏日の日本  
名）、金忠龜の六人の在日朝鮮人が一五首、ないし三〇首の歌  
を寄せている。

このうちとくに活動が目立ち、扱いが大きいのが、リカ・  
キヨシである。李承源という朝鮮名をもつリカ・キヨシ（戸  
籍名は李家清一）は一九三三年、朝鮮半島の晋州で生まれ、  
一九三〇年に渡日してきた在日一世である。一世とはいへ、  
幼少期の渡日ゆゑ、朝鮮語はできない。第一歌集『人間記録』  
が出た際、雑誌『短歌』一九六〇年一〇月号は彼に紙幅を提  
供し、同書からの五〇首が自選によつて掲載された。作風と  
しては、韓武夫より直截的なリアリズムの歌が多いと言えよ  
うか。さきの田井安曇も韓武夫同様、このリカ・キヨシに対  
しても早くから注目し、論評を加えている。

も緑からやがて鮮紅色に変わり、葉の緑との対照が鮮やかだ。  
単なる農村の風景を詠んだようでありながら、秘められた抵  
抗の意志を感じさせる秀歌だと思ふ。稔るほど頭を垂れる稲  
穂とは違う麦の結実を詠んだ後者からも、同様の強い抵抗の  
姿勢が読み取れる。

また、妻の籍に入れたため国籍を異にする子や、その子と  
の葛藤を歌った歌も身につまされる。

・呑み難き血のつながりよ戸籍なき子のまぼろしに頭つ黒  
き花

・育ちゆく子のかなしみを内に秘め硝子に欠けし黝き日を  
みつ

・父へ向くる吾子の怒りや冬の玻璃微塵に毀け光こぼるる  
いずれも、韓武夫の歌の傾向と、その並々ならぬ表現力が  
発揮されていると思う。

この歌集『羊のうた』に対しても本格的な評論は、  
筆者の知る限り田井安曇（我妻泰／わがつま・とおる）が短  
歌雑誌『未来』一九七六年四月号から翌年一月号まで断続的  
に六回連載した「羊のうた・韓武夫私注」である。この論考  
はのちに、田井安曇『現代短歌考』（不識書院、一九八〇年）  
に収められ、さらには『田井安曇著作集』第二巻（不識書院、  
一九九八年）にも収録された。ここで田井は韓武夫のことを、  
「在日朝鮮人中第一指を屈すべき歌人」と書いてから、「いや  
正確に言えば形容ぬきの歌人として秀れている」と言い直し

この二人を含む六人のうち、五人までが短歌の結社に所属  
している。またこの六人以外にも、『昭和萬葉集』別巻の索引  
を見ると、在日朝鮮人とおぼしき名前がいくつもある（本稿  
末尾の「資料1」参照）。そうしてみると、在日朝鮮人中の短  
歌人口は、いま一般的に認識されているよりはだいぶ多かつ  
たのかもしれない（同じく「資料2」も参照）。

しかし、さきに検討したように、「在日朝鮮人と短歌」とい  
うと普通思い浮かぶのは、金夏日か李正子あたりからであつ  
て、それまでの歌人の営みは、在日朝鮮人の世界で完全に忘  
却されている。その理由はおそらく、初期の在日歌人の歌集  
が、大手の出版流通の世界とは縁遠いところで出されていた  
こともあるが、それ以上に、まさにこの特集号に許南麒の載  
せた「似非・短歌論」（『羊のうた』の「後記」に一部引用）  
が言うように、「朝鮮人なら朝鮮語で創作活動をすべきであ  
つて、日本語で、しかも何でよりによつて短歌なのか？」（要  
旨）という疑念であろう。

雑誌『短歌』が一九六〇年に在日朝鮮人歌人特集「祖国を  
うたう」を組んだのは、実は前年末から始まった北朝鮮への  
帰国事業に呼応してのものであつた。同誌巻末の「後記」で  
は、「異国で、しかもその国の伝統詩型によつて祖国への想い  
をつづつたこれらの人々の哀しみや苦しみは、わたしたち日  
本人全体の心の問題として、むかえなければならぬもの  
ようにおもいます」と記されている。それにもかかわらず、

許南麒のこの文章では、これらの在日歌人が短歌でその歓迎の気持ちを表すことが、「悲劇」「悲壮な出発」「奇妙な感じ」といった否定的な語で表現されている。自分たちの文学を「何語で書くか?」という用語論争は、戦後のごく初期からあり、日本語による在日朝鮮人文学を「奇形視」する見解が一部で根強く存在してきたが、ここでは使用言語とともに表現形式が問題視され、民族的に「正しい」とされる立場から断罪が加えられている。こうした風潮のなかで、日本的なるものを象徴する文学形式で自己表現してきた詠み手たちの創作活動は、限られた範囲内のひそやかな営為にならざるをえなかったものと思われる。

許南麒の主張には、在日朝鮮人にとつての「祖国観」や「民族意識」をめぐる、ある時代精神が刻印されており、植民地時代に押しつけられた日本文化、なかでもその典型とみなされた短歌への反発心が働いている点は理解する必要がある。しかし現在に至っては、そうした観点よりも、まさに「台湾万葉集」がそうであったように、たとえ「異国」の言葉と文学形式であれ、彼らの身近にあったのはその手段にほかならないのであり、それにより自己表現をしてきた在日朝鮮人、とくに職業的な作家やいわゆる文壇・論壇の知識人とは異なる庶民の内面世界と作品世界を、虚心坦懐に覗いてみることのほうが大事なのではないだろうか。そういう目で眺めてみた場合、従来知られていない短詩型文学の詠み手や、見過ご

されてきた貴重な作歌・作句活動が、埋もれた歴史のあちこちに発見できるに違いない。

「民族的」であるか否かを評価の最重要指標とすべきでないという同様の指摘は、在日朝鮮人の文学一般や、他の文化活動においても言えるであろう。このささやかな小論を終えるにあたって、韓武夫をはじめとする知られざる在日歌人たちの生と精神の軌跡および作歌活動を、在日朝鮮人史の中で正當に位置づけていくと同時に、近年の「国籍」や「民族」の捉え方の変化に即応して、在日朝鮮人による自己表現の歴史全般をより広い視野で見直して必要性を強調したい。以下に掲げる「資料1」「資料2」も、そうした意図のもとに一つの素材を提供するものである。

【資料1】『昭和萬葉集』に収録された在日歌人

※講談社『昭和萬葉集』(全二〇巻、別巻一巻)から、韓国・朝鮮系の歌人を拾ってみた。とくに日本式の名前をもつ人の中に、見落としがあるかもしれない。

■韓武夫

- ・第一巻に歌集『羊のうた』から二首
- ・第三巻に歌集『羊のうた』から一首
- ・第四巻に歌集『羊のうた』から二首
- ・第六巻に合同歌集『昆虫祭』(一九七二年)から二首、『短歌』一九七一年一月号から二首、計四首

年九月号から四首、計六首

・第二〇巻に『アララギ』一九七五年五月号から一首

■河義京

・第三巻に『短歌』一九六三年五月号から一首

■金忠龜

・第三巻に『短歌』一九六三年二月号から二首

■尹政泰

・第一七巻に『短歌』一九七二年六月号から四首

・第一八巻に『未来』一九七三年二月号から二首

■李正子

・第一八巻に『朝日新聞』一九七三・一一・二五から一首

・第一九巻に『朝日新聞』一九七四・三・二三、一九七四・七・七から各一首、計二首

・第二〇巻に『朝日新聞』一九七五・四・二七、一九七五・六・八から各一首、計二首

■朴貞花

・第一九巻に『朝日新聞』一九七四・四・六から一首、一九七四・一・二六から二首、計三首

・第二〇巻に『朝日新聞』一九七五・七・四から一首

■孫春任

『孫春任』

■リカ・キヨシ

- ・第七巻に歌集『人間記録』から二首
- ・第九巻に歌集『人間記録』から六首
- ・第一巻に『新日本歌人』一九五五年二月号から四首
- ・第二巻に歌集『人間記録』から一首
- ・第三巻に『短歌』一九六三年三月号から一首、『短歌』一九六二年九月号から一首、計二首
- ・第一八巻に歌集『告日本歌』から三首

■川野順(兪順凡)

- ・第五巻に『アララギ』一九四一年二月号から一首
- ・第一巻に『未来』一九五六年六月号から二首
- ・第二巻に『未来』一九五七年三月号から二首、一九五七年九月号から一首、計三首
- ・第三巻に『未来』一九六〇年三月号から一首、一九六二年一月号から一首、計二首
- ・第一九巻に『未来』一九七四年八月号から一首

■金夏日

- ・第一巻に合同歌集『陸の中の島』(一九五六年)にこの名は「金山光男」から一首
- ・第二巻に合同歌集『盲導鈴』(一九五七年)から二首
- ・第一七巻に『アララギ』一九七二年五月号から一首
- ・第一八巻に『アララギ』一九七三年六月号から一首、『高原』一九七三年七月号から一首、『アララギ』一九七三

・第一九卷に『朝日新聞』一九七四・三・二六から一首

#### ●朴順慶

・第一九卷に『朝日新聞』一九七四・三・二から一首  
・第二〇卷に『朝日新聞』一九七五・五・一から一首

#### ●孫戸妍

・第九卷に、歌集『無窮花』（一九五八年）から五首

※孫戸妍は韓国在住の数少ない歌人で、在日ではないが、ここではあえて入れておく。

#### 【資料2】戦後在日朝鮮人個人歌集リスト（発行年代順）

※歌集は自費出版物として出され、関係者への配布のみで終わることが多いため、入手や確認が難しい。このリストも不完全なものにすぎないが、今後の研究の進展を考慮してここに載せた。関心のある方々のご協力を得て、順次補充していきたい。なお、目にする機会の乏しいものを中心に、簡単な抜粋や解説を加えておいた。短歌愛好者が地方にも多いことを示す意味で、居住地が明らかにされている人については、それも記載した。

#### ●リカ・キヨシ『人間記録』（白玉書房、一九六〇年）

豊橋市在住。所属は「核ぐるーぷ同人、新日本歌人会員」等とあり、本書も「核ぐるーぷ叢書No.1」として出版された。戦後、在日朝鮮人によってまとめられた歌集の中では、最も早いものに属すると言えよう。奥付頁には、一冊

ずつナンバーが打たれている。リカ・キヨシは一九四三年、二〇歳の秋に斎藤瀏の『万葉名歌鑑賞』を読んで触発され、短歌を作り始めた。そのとき以来の四〇〇〇首余りの中から、三八三首を自選しては制作順に収めた、という。巻末に収録された「私の素顔」により、この知られざる歌人の生い立ちを知ることができる。自らが経営する古本屋の店先で撮った写真も、一枚挿入されている。

#### ●韓武夫『羊のうた』（桜桃書林、一九六九年）

大阪市生野区猪飼野在住。本歌集には師である大野誠夫の「序」が付され、「作風叢書第十六篇」と銘打たれている。二三頁にわたる「後記」が、歌人の経歴を知らせてくれるだけでなく、戦前戦後の激動を生きてきた一人の在日朝鮮人の精神史としても貴重である。短歌という文学形態については、「異邦人である私が作ってみて、すこしもへんに感じないし、かえって伝統の根強さと、その鮮らしさに感嘆する。日本文学から小説が減ることがあっても、短歌は決して滅亡しないと確信する」との見解が記されている。

#### ●金夏日『無窮花』（光風社、一九七一年）

著者は、群馬県草津町にある国立ハンセン病療養所「栗生楽泉園」に居住。一九二六年慶尚北道に生まれ、一九三九年渡日。一九四一年にハンセン病を発病、東京の多磨全生園を経て、戦後「栗生楽泉園」に入園。一九四九年、両目を失ったにもかかわらず、短歌を学び始め、鹿児島寿蔵

主宰の「潮汐会」に入会、キリスト教にも入信した。上掲「資料1」にあるように、金夏日はこれまで合同歌集などに歌が採られたことがあったが、個人としてはこれが第一歌集である。「潮汐叢書第五十八篇」と銘打たれた本書には、作歌を始めた一九四九年以来の歌が年代順に収められている。自らの病状、点字舌読や朝鮮語学習の苦労、家族の動静を歌ったものほか、朝鮮戦争や北朝鮮帰還・日韓会談など、朝鮮をめぐるその時々を情勢を詠み込んだ歌も多い。師の鹿児島寿蔵が「序歌」を、荒垣外也が「解説」を寄せている。「あとがき」の中で、本歌集出版を契機に、従来使ってきた日本名「金山光雄」を捨て、本名の金夏日でいくことが明らかにされている。

なお金夏日は、これに続けて第二歌集『黄土』（短歌新聞社、一九八六年）、第三歌集『やよひ』（短歌新聞社、一九九三年）、第四歌集『機を織る音』（皓星社、二〇〇三年）を出しているが、几帳面な年代順配列や歌に社会情勢を多く盛り込む点などにおいて、第一歌集の特徴が引き継がれている。

#### ●川野順『荊』わが半生記と折々の歌（自費出版、一九七二年）

著者は、鹿児島県鹿屋市にある国立ハンセン病療養所「星塚敬愛園」に居住。一九一五年慶尚北道に生まれ、一九三三年渡日。一九三七年にハンセン病を発病し、以後終生にわたって各地のハンセン病療養所での生活を余儀なくされた。一九四〇年に「アララギ短歌会」入会、キリスト

教にも入信し洗礼を受けるなど、上掲金夏日との共通点が見出せる。韓国名は兪順凡だが、ここでは伏せられている。通称の日本名にした理由を、本書「あとがき」では、「長年使ってきたこの名前に、わたし自身一種の愛着感のようなものを持っているのはいうまでもないが、今やハンセン氏病も、医学的には不治の病ではなくなったにしても、後遺症をもった菌陰性者にとっては、根深い世間の偏見を意識しないわけにはゆかないので、敢て本名を隠すことにした」と説明している。日本のハンセン病療養所生活者の中には、在日朝鮮人の占める割合が高いが、在日朝鮮人差別のほか、ハンセン病に対する社会の偏見を意識し、本名以外の日本名・朝鮮名で生きている場合が少なくない。副題の通り、前半四分の三が自身の歩みを記した人生記録で、後半の約四分の一の分量が、その生活のなかで作られた短歌にあてられている。

のちに歌人の死後、本書の内容と、川野順のその後の歌・エッセーなどを収録した大冊の『狂いたる磁石盤』（新幹社、一九九三年）が編まれた。そこに収められた島比呂志の文章や古明地実の解説によれば、この『荊』は療養者によるいわば手作りの本にもかかわらず、第五版まで版を重ねてよく売れたという。また、自伝部分がKLM（韓国救難協会）会長の辛定夏によって翻訳され、韓国語版『荊棘の半生記』（三三閣）として出版された。

#### ●尹政泰『書かれざる意志』（短歌新聞社、一九七六年）

広島県福山市在住。巻末の「あとがき」にあたる「遅れ書

きの言葉」は、「退かざる被支配の裔の決意としての『書かれざる意志』はおおかたの読者にむしる黙殺をもってむかえられることこそ庶幾うものである。それがボクの、ボク達在日本朝鮮人二十代を飾るもつともふさわしい青春であろう」との屈折した言葉で結ばれている。歌自体にも、若き魂の発露とも言える過激で難解な表現が目立つ。植民者二世として朝鮮に生まれ育った経歴をもち、在日歌人の活躍を後押ししてきた歌人の近藤芳美が「序」を寄せている。そこでは、「朝鮮人である尹君が、その自己表現のことはとして異国でありかつての抑圧者である日本のことばを用い、詩型を選ばなければならなかった事実」に対して、重い気持ちにならざるをえない心情が綴られている。

●リカ・キヨシ『告日本歌』（白玉書房、一九七八年）

『「楡」ぐるゝぶ叢書 No.1』と銘打たれた、リカ・キヨシの第二歌集。第一歌集上梓後の一八年間に作った約二二〇〇首余りの中から四五〇首を選定、ほぼ制作年月順に配列されている。巻末に自伝的文章が三本置かれているほか、前作同様、著者のスナップ写真が一枚収められている。

●李正子『鳳仙花のうた』（雁書館、一九八四年）

著者は三重県上野市在住の在日朝鮮人二世で、短歌結社「未来」所属。中学校時代に短歌と出会い、二十歳のころ自らの民族を模索する過程で、作歌を始めたという。この第一歌集『鳳仙花のうた』は、在日女性による歌集とし

の日本を愛しながら、いのちある限り短歌を作り続けてゆくつもり』だとある。

実は、これは鄭上達の第三歌集で、それ以前に『無窮花』『午後の透明』の二作があるというが、筆者は未見である。

●本村弘『地下足袋のうた』（オーム出版社、一九九〇年）

著者は「崔」という姓をもつ父親と、「本村」の姓を名乗る母親の間に生まれた、いわゆる日・朝のダブル。その立場を歌にし、「新日本歌人」にも所属しているというが、筆者は未見である。

●金里博『堤上』（まろうど社、一九九一年）

京都市在住。一九四二年慶尚南道に生まれ、二年後に母に背負われて渡日。朝鮮大学校卒。金里博の名は、朝鮮人に最も多い姓である「金」「李」「朴」を組み合わせて作ったペンネームという。本書「あとがき」で、「日常生活を本国人と同じ水準で駆使できない者は、どのような弁解をしようと韓国人とは言えない、というのが私の信条」と豪語しているように、金里博は朝鮮の伝統的短詩型文学である時調にも素養があり、『ハンギル』（海風社、一九八七年）という第一時調集を出している。またハンダルの詩作も継続的に行なっており、本書巻末の「経歴」では、朝鮮語での詩作に終生こだわり続けた「故・姜舜の門下生」とも記している。『しんぶん赤旗』などに短歌作品を発表している金忠亀（上掲「資料1」参照）が、「跋」を寄せている。

ては最も早い部類に属すると言えよう。在日朝鮮人をめぐる疎外感や不条理を撃ち、奪われた民族の名前や文化を回復しようという志向性が、歌の基調をなしている。「朝日歌壇」選者で、李正子を見出し歌集出版を勧めた近藤芳美が「序」を書き、また彼女自身の生い立ちや歌との出会いを綴った「近藤先生への手紙」が、別刷のリーフレットの形で本書に添えられている。

第二歌集『ナグネタリョン』（河出書房新社、一九九一年）は、在日朝鮮人の歌集が自費出版や小さな出版社からではなく、大手出版社の出版物として出された嚆矢であった。ここから採られた三首の歌が、三省堂発行の高校一年生用「国語」教科書に再録されたことあわせて、まさに時代を画する出来事だったと言えよう。そのことで李正子は、在日歌人の代表格の扱いを受けるにいたった。李正子は、ほかに第三歌集として『葉桜』（河出書房新社、一九九七年）、第四歌集として『マツパラムの丘』（作品社、二〇〇四年）を出すなど、地方にあつて精力的な作歌活動を継続している。

●鄭上達『わき道より道しぐれ道』（自費出版、一九八六年）

東京都北区在住。扉や奥付などには、「平山清子」という日本名も併記されている。夫・申鉉武の七回忌に際して、詠みためた五一六首をまとめて追善のしるしにしたいという意図で編まれた。「あとがき」には、「韓国に育ち、結婚と同時に見も知らなかった日本に移り住んでから四十余年、（中略）亡き夫を慕ひ、祖国韓国を偲び、そしてこ

●朴貞花『身世打鈴』（砂子屋書房、一九九八年）

東京都町田市在住。一九七三年、初めての短歌を「朝日歌壇」に投稿して以来の歌がまとめられている。感情をストリートに言葉にした歌が多く、また朝鮮絵巻色が濃い。ここでもまた「朝日歌壇」で朴貞花を見出し、何かと支えてきた近藤芳美が「序文」を書いている。近藤は、彼女の歌は技巧的には巧みとは言えないが、私たちはほとぼしる肉声の叫びを聞かねばならない、としている。

●朴玉枝『身世打鈴』（自費出版、二〇〇〇年）

愛媛県在住。一九三七年、兵庫県生まれの在日朝鮮人二世。一九九九年のNHK主催全国短歌大会で、その作品「弟が兄に与へむ賢一つ吾子の二人が運ばれていく」が最優秀賞を受賞したこともある。作歌を始めてから約一〇年間の歌がまとめられている。薩摩焼第一四代の沈壽官が「序」を付している。写真入りのインタビュー記事が、『民団新聞』二〇〇〇年七月二二日付けにある。

●キム・英子・ヨンジャ『サラン』（文學の森、二〇〇五年）  
福岡県飯塚市在住。一九六〇年生まれの在日二世。本名は金英子だが、歌人としては、親から賜った「英子（えいこ）」という名を残したいとの思いで、「キム・英子・ヨンジャ」と名乗る。中学の教科書に載っていた若山牧水の歌に心引かれて、短歌を詠むようになったという。表題の「サラン」の言葉通り、この歌集には異性への愛や恋、

そして子に対する親の愛などが、日常の生活風景のなかで歌われている。また、日本社会への違和感と同時に、在日の立場からみた本国への違和感もまた率直に表現されている。写真入りのインタビュ記事が、『民団新聞』二〇〇五年六月八日付けにある。

※本稿は二〇〇六年六月一七日、九州大学韓国研究センターと韓国全北大学校人文学研究所の主催で、九州大学にて行なわれた国際シンポジウム「在日朝鮮人文学の世界」での発表原稿に、増補・改訂を加えたものである。

編集後記

敗戦（解放）前の朝鮮人による日本語文学を前史とする「在日」文学は、六〇余年の歴史を刻んできた。そのあゆみを明らかにする特集を組みたいと考えた。このことは日本語文学を研究対象とする学会誌が今まで試みなかったことであり、「社会」を視座に文学を読み解こうとする本学会の責務であるように思われた。

近年、「在日」文学の変容・拡散が言われている。磯貝治良氏は、民族や、差別への抵抗を主題としない若い作家の登場を「在日朝鮮人文学」から「在日」文学への変容と表現し、川村湊氏は、『図書新聞』のインタビュで「在日」文学と名づけられたものが出来たときには、すでに「在日」文学は終わっているのだ」と述べた。だが、川村氏が同じインタビュのなかで指摘しているように、このような変化が「在日」文学を「ポストコロニアル文学」や「ディアスポラの文学」として読み解く契機となっていることも事実である。「在日」文学は、侵略戦争や植民地支配の記憶を忘却・隠蔽し、自ら脱植民地化しない日本社会の在りようを主題化しつつ、現在いる場所と、いるべき場所／欲望する場所との乖離の状態にある人間の在りようを描き出した

ものとしてもう一度読み直されるべきである。「在日」文学は「在日」の在り方を問うていると同時に、「在日」と共存／共生する日本人のあり方をも問うているのである。李恢成氏にインタビュをお願いした当初、頑なに断られた。だが、インタビュを終えた後、おそらく李氏は、その時「断っていた」のではなく、「在日」文学と向き合う日本人の姿勢を「問うていた」のだと気づかされた。本特集のインタビュ・論文・エッセイ・創作にはこの問いが含まれているように思われる。それにどう応答していくのが今後の「在日」文学研究の課題であるとも言えるのである。私事にわたって恐縮だが、李恢成氏と出会ったのは李氏が講師を務めていた法政大学の教室であった。「光州事態」のおきた年である。それから四半世紀以上の時が過ぎた。韓国は大きく変化した。が、「在日」をめぐる日本の状況は変わっていないようにも思われる。「在日」と真に共生できる日本社会を構築するために「在日」文学はさらに読まれ、研究されるべきである。本特集がその一助となれば幸いである。インタビュにに応じてくださった金石範氏、李恢成氏をはじめ執筆者の方々に感謝したい。（河合 修）

「社会文学」第19号 特集 幻想としての「地方」

- I 文学産出の場としての「地方」  
幻想としての「地方」  
演技空間への旅―井伏鱒二の「田舎」可能性としての津軽―「郷土」と「地方」と「田舎」
- II プロレタリア作家と「地方」  
葉山嘉樹と「地方」―労働教育運動をめぐる宮地嘉六―「故郷」への幻想  
三好十郎における「地方」の意味  
「党生活者」に構造化された「東京」と「細胞」の主体性問題
- 黒島伝治「電報」と農村における学歴取得の意味  
「種蒔く人」の「土崎版」と伊藤永之介  
III 「帝國」の「内」と「外」  
中村地平と台湾―「熱帯柳の種子」をめぐる大正期「南洋」論の展開―鶴見祐輔と芥川龍之介  
米国軍政下沖縄の文学―詩と戦記  
(エッセイ)  
「一国会主義」の超克をめざす―日韓共同主催学会に参加して
- 平野 栄久
- 自由論文  
「教科構造論としての〈文学科独立論〉考  
―国語教育における「政治の季節」―  
(書評)  
伊藤 忠著「作品と歴史の通路を求めて―近代文学」を読む  
幸田 国広
- 小澤勝美著「小田原と北村透谷」  
山崎正純著「戦後「在日」文学論―アジア論批評の射程」  
小杉野要吉著「ある批評家の肖像 平野謙の「戦中・戦後」」  
渡辺房男著「われ活券にかかわらず」その他  
川端俊英著「破戒」と人権  
(新刊紹介) ほか  
二〇〇三年九月刊
- 定価(本体価格一八〇〇円十税)

社会文学第26号編集委員

- 伊原 美好 浦田 義和
- 岡野 幸江 河合 修
- 川村 湊 小林 孝吉
- 佐川 亜紀 菅井 かをる
- 長谷川 啓 深津 謙一郎
- 矢澤 美佐紀
- 沼田 真里

二〇〇七年六月二〇日発行

社会文学 第二六号

編集 『社会文学』編集委員会
発行 日本社会文学会 代表 高橋敏夫
東京都新宿区戸山一―二四―一 早稲田大学文学部高橋敏夫研究室 〇三(五二八六)三三七三
制作 (株) 青柿堂
東京都千代田区神田神保町三―二五―一
発売元 不二出版(株)
東京都文京区向丘一―一―二二 電話〇三(三八二二)四四三三